

地域の音楽としての童謡の教材化と授業実践

—島根県石見地方の詩人・佐々木寿信の詩による童謡に着目して—

永田 聖子

Seiko NAGATA

Development of Teaching Materials and Teaching Practices based on Regional Children's Songs
- With a Focus on Children's Songs by the Poet Toshinobu Sasaki from Iwami, Shimane Prefecture -

【 要 旨 】

本研究は、島根県大田市出身・在住の童謡詩人である佐々木寿信について、その人物像と創作活動の全体像を明らかにするとともに、佐々木の詩による童謡を「地域の音楽」としてとらえ、音楽科における地域独自の歌唱教材の開発を試みたものである。

佐々木は統合失調症と向きあいながら、25歳の頃から本格的に童謡詩を書きはじめ、新聞や雑誌に投稿し、コンクールにも応募するようになった。その後、次第に童謡詩人として認められるようになり、広く全国に知られる存在となっていった。「三木露風賞新しい童謡コンクール」では2度の最優秀賞受賞をはじめ、入賞を重ねている。

本稿では、佐々木の童謡詩人としての活動歴や作品一覧をまとめたうえで、小学校において佐々木の童謡を教材とした授業実践を行い、地域の音楽としての童謡という視点から、授業のモデルプランを提示した。

【キーワード：地域の音楽 童謡 佐々木寿信 三木露風賞新しい童謡コンクール 教材化】

I はじめに

1 研究の目的

島根県大田市在住の童謡詩人・佐々木寿信（1948～）は大田市を拠点に40年間童謡詩を創作し、発表し続けている。2013年2月から3月にかけては、NHKEテレ「NHKみんなのうた」の中で、佐々木寿信作詩・中川俊郎作曲の童謡《泣き虫ピエロ》が全国に放送され、すでにCD化もされている。佐々木は、我が国の代表的な童謡詩のコンクール「三木露風賞新しい童謡コンクール」において、1989年・1993年・1996年に入選、1992年・2004年に最優秀賞を受賞するなど、全国に知られる童謡詩人である。18歳で統合失調症を発症したが、現在も病気と向き合いながら創作活動を続けている。2005年にはNH

K教育テレビでドキュメント番組も放送され、多くの音楽関係者からも注目されている。

本研究の目的は、佐々木寿信について、その人物像と創作活動の全体像を明らかにするとともに、佐々木の詩による童謡を「地域の音楽」としてとらえ、音楽科における地域独自の歌唱教材を開発することである。

2 研究の背景

筆者は、益田市を拠点とする少年少女合唱団「グラントワ・ユース・コール」を指導する中で、佐々木の詩による童謡に出会い、多くの佐々木作品をレパートリーにしてきた。佐々木の詩による童謡は子どもたちの心をとらえ、等身大でのびのびと表現することができると感じてきた。その童謡は島根の美

しい風土や温かい人間性を感じさせ、やさしい言葉で大変親しみやすく、歌うことで共感し感動できるものでもある。このように全国的に知られる童謡詩人が島根県に在住し、すばらしい童謡が数多く生まれているにもかかわらず、地元である島根県ではあまり知られていないように感じている。筆者は佐々木の存在と童謡をもっとたくさんの島根県の子もたちに知ってほしい、歌ってほしいと願い、私たちが生活する地域、島根県に在住する童謡詩人・佐々木の存在と、佐々木の詩による童謡を研究の対象とした。

3 研究の方法

まず佐々木の全作品を収集し、整理した。その際、詩・短歌・随筆・小説などの文学作品と、童謡の楽譜、CD、DVDなどの音楽作品になったものに大きく分けた。特に佐々木の詩には、全国の作曲家が次々と曲をつけており、楽譜に関しては重複して印刷・出版されているものも多かった。楽曲を、集録された曲集ごとと作曲家ごとにそれぞれ分類し、どの詩が作曲されて童謡になっているのかなどを、一目で見て分かるように整理した。

次に自著の小説・短歌集・詩集・随筆集などから、佐々木の童謡詩に対する気持ちや思いの変化を時系列的に読み解いた。そして、周りの人との関わり方や童謡詩の内容の変化とどのように関連しているのかについて、佐々木のこれまでの歩みを大きく4期に分け、活動歴としてまとめた。

そして、佐々木の童謡詩人としての出発点にさかのぼり、どのようなきっかけで童謡界の詩人や作曲家とつながりを持ち、童謡が誕生していったかを探っていくことで、童謡詩人・佐々木寿信の人物像を明らかにしていった。続いて、「三木露風賞新しい童謡コンクール」の受賞作品に焦点を絞り、それらの詩や童謡の魅力を考察した。佐々木がどのようにコンクールに出品し、作曲家と出会い、最優秀賞を受賞するに至ったかについて、受賞作品一つひとつを検証した。さらに、人物像と童謡作品の両面から、佐々木とその童謡の魅力について検証した。「三木露風賞新しい童謡コンクール」については、主催者である(財)童謡の里龍野文化振興財団(兵庫県たつの市)に出かけ、資料を収集するとともに、同コンクール入賞詩発表会の様子を調査した。これらの過程で、手紙や電話、インタビューなどを通して、佐々木自身の生きた声を記していくことを心がけた。

一方で授業実践研究にも取り組んだ。佐々木の

数々ある童謡の中から、イメージが広がり、詩と音楽とが一体となった美しさを味わえる曲を選び、教材開発に取り組んだ。一人でも多くの子もたちに佐々木の童謡を歌う機会をつくっていきたいと考え、学校の一般的な現状をふまえた上で、学校規模や児童数にかかわらず取り組みやすい題材を設定し、授業のモデルプランを提示した。児童が自分たちの暮らす地域の美しさや素晴らしさを再認識し、佐々木の童謡を思いや意図をもって歌ったり、創造力豊かに鑑賞したりすることができるように、授業実践を通して検証した。

4 先行研究と鍵概念

童謡詩人としての佐々木は、詩の世界や童謡の世界ではよく知られた人物である。佐々木や佐々木の童謡に関する先行研究は、筆者の知る限り見当たらない。

佐々木の童謡を教材化していく際には、童謡、唱歌、わらべ歌、郷土の音楽、地域の音楽などについて、近い領域の関連する文献に数多く当たった。そして、音楽教育のこれまでの研究と実践の傾向を把握し、本研究の基盤とした。

なお、本研究では、「詩」とは、佐々木が書いた詩全般を対象とする。また、「童謡詩」とは、佐々木が「童謡」として歌うことを前提に創作した詩を対象とする。

平成23年度から完全実施となった小学校の学習指導要領では、「それぞれの地方に伝承されているわらべうたや民謡など日本のうたを含めて取り上げるようにすること」とある。また、平成24年度から完全実施となった中学校の学習指導要領では「我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるようにすること」とある。

学校音楽教育の場では「郷土の音楽」という言葉がよく使われているが、一般的にどのような音楽のことを指すのであろうか。小島律子は「音楽授業の中で郷土の音楽をどう扱うか」において、次のように述べている。

もともと「郷土の音楽」という用語は、学習指導要領と関連して登場してきたといえる。小・中・高等学校段階のいずれも、「内容の取り扱い」において、教材の範囲を示す中に「郷土の音楽」が含まれ、「伝統的な音感覚」とか「伝統的な音楽文化」から教材としての意義が記述されている。つまり、日本伝統音楽に関連する教材のバラエティ

の一つとして位置づけられてきたといつてよい。
(小島 2008, p. 216)

このように、「郷土の音楽」とは、その地域に伝わる伝統的な音楽と解釈されることが多い。具体的には、その地域に伝わるわらべうた、民謡、囃子、まつりの音頭、などである。人から人へ伝承されてきた地域独特の音楽や伝統芸能と共に継承されてきた音楽をさすことが一般的である。島根県の小学校では、教育芸術社の教科書や副教材の音楽ワーク（地域版のページ4～6年）に《安来節》《キンニャモニヤ》《石見神楽》《鷺舞》などが掲載されている。

伊野義博は、『郷土の音楽』教材化試論』の中で、次のように述べている。

「郷土」という語に対して、そこで生まれ育った人・個人の存在が意味をなしてくるのであり、重要なのは郷土に対する個の意思や意向、思いの作用であるとした。

(伊野 2003, p. 76)

佐々木の詩による童謡は、地域に伝わる伝統音楽ではない。しかし、伊野も考え方に依拠すれば、島根県大田市に生まれ育ち 40 年間詩を書き続けてきた佐々木の存在に意味があり、佐々木のふるさとに対する思いから生まれた詩と童謡は、演奏したり聴いたりする人を巻き込み、思いを共有化できる作用をもつと考えることができる。

このように学習指導要領を広義に解釈すれば、佐々木の童謡は「郷土の音楽」に位置付けることができるのではないかと考える。しかし、佐々木の詩による童謡は現代に生まれる音楽である。仮に研究テーマに「郷土の音楽」という言葉を使用したとき、佐々木の童謡が、一般的にもたれている日本の伝統音楽のようなイメージでとらえられる可能性があるのではないかと考えた。

そこで、佐々木の詩による童謡のように、現代に生まれている音楽の中にも、音楽的価値の高い、その地域特有の音楽が存在すると考え、あえて本研究では佐々木の詩による童謡を「地域の音楽」ととらえ、位置付けることとする。

II 童謡詩人・佐々木寿信の活動歴

佐々木は2013年8月現在、65歳である。佐々木の経歴は大きく4期に分けることができる。

まず、1期は誕生から18歳の高等学校卒業までである。佐々木は、島根県大田市五十猛町に、1948年（昭和23）大浦港の至近にある漁師の家に、三男、五番目、末っ子として生まれた。佐々木の作品からは、幼児期・児童期と感受性豊かな少年へ成長し、幸せな毎日を送っていたことがわかる。

佐々木は、1960年大田市立五十猛中学校に入学した。中学校入学当初は野球部、そして理科部、3年生の時には陸上部に所属していた。スポーツマンでもあり探究心も強かった佐々木であるが、将来詩人になりたいという夢を持つようになった。その経緯を、児童文学界を牽引する詩人・児童文学作家である武鹿悦子(1928～)は、佐々木の出版に際して送った『きりんさん』おめでとう』の中でこう述べている。

中学校三年の時に、三好達治の「草千里浜」を夏休みの宿台帖で読み、以来、詩人が将来の夢になったという彼は、また、小学一年の時に音楽教科のなかで習った「兎の電報」や「りんごのひとりごと」などの童謡に心惹かれ、自然に童謡を書くようになりました。

(武鹿 2008, p. 99)

多感な中学校時代、佐々木はスポーツや勉学に積極的に関わり、様々なことにチャレンジしていたことが分かる。一方で、三好達治の《草千里浜》に感銘した佐々木は、漠然とではあるが詩人を夢見るようになったと思われる。

1963年、佐々木は島根県立大田高等学校に入学する。佐々木は、積極的に友達と交流を持ちながら、勉強やスポーツに前向きに関わり、春から秋までの半年をかけ、小説（物語）を書いていたようである。明るく活発で文学や音楽の好きな高校生であった様子がうかがえる。

次に、2期は1966年（18歳）から1973年（25歳）までの、統合失調症を発病し、大学の退学、闘病生活を余儀なくされた7年間である。

1966年、佐々木は島根大学文理学部理学科に入学し、初めての一人暮らしを経験する。期待に胸を膨らませてスタートした大学生活であったが、環境の変化や慣れない一人暮らしが原因となり、松江市の下宿先で統合失調症を発症した。そして、大学を中途退学せざるを得なかった。佐々木はどのような気持ちで再び故郷の地に帰ってきたのであろうか。い

ずれにしても、2期の7年間は、佐々木の一番苦しい時期である。

次に、3期は1973年(25歳)から1984年(36歳)までの、詩を書き始めてから最初の詩集『童謡集 白い秋』を出版するまでの11年間である。25歳のある日、佐々木に転機が訪れた。それは、偶然聞いた、北原白秋作詞・山田耕筰作曲の《この道》だった。佐々木は《この道》に強く心を揺さぶられ、自分もこのような歌が作りたいと志を胸に抱き、本格的に詩を書くようになったのである。佐々木は、『随筆集 日時計』の中で、「童謡詩」についての思いをこう述べている。

二十五歳の時、遅ればせながら志を立てました。

童謡の詩を書こうと思いました。音楽ということにも心を動かさせられ、時代に残る作品が出来たらと思いました。

詩のジャンルでも童謡詩が私の価値観で高い位置をしめました。

曲がついて初めて童謡は成就するものだと思います。

詩自体で成立するのも悪くないのですが、童謡ということで世に残る作品を作れたかったです。

(佐々木 2012, p. 19)

佐々木は、童謡詩人になるという志をもち詩を書き始めた。しかし、病気と向き合いながらどこに発表するあてもなく書き始めた当初の詩は、仲間から一人取り残されていく強い孤独感に覆われていた。

次に、4期は1984年(36歳)から2013年(65歳)までの29年間である。1985年からは、詩人・武鹿悦子との交流が始まっている。また、作業所や施設での仕事も順調に進むようになった時期である。

2005年12月8日(木)にNHK教育テレビで放送された、福祉ネットワーク「童謡が支えてくれた～統合失調症と歩んだ40年」の中では、前向きな詩が書けるようになった佐々木の変化が童謡とともに紹介されている。

佐々木は、1995年、社団法人日本童謡協会に入会し、作曲家や詩人に童謡詩を送って知己を得るようになった。また、各地で開催される童謡のコンクールに応募してその努力を認められ、同級生や身近な人々の支援や地元の温かい応援を受けるようにな

った。

このように継続して数多くの詩を創作、発表し、我が国の代表的な童謡詩のコンクール「三木露風賞 新しい童謡コンクール」では、1992年に《なつの終わり》で、2004年には《きりんさん》で最優秀賞を受賞したのである。この受賞を機に、武鹿悦子の編集のもと、2008年には『きりんさん 佐々木寿信童謡集』が発行された。詩の添削というかたちで1985年より28年間佐々木と交流をもち、発行を支援した武鹿は同書の『「きりんさん」おめでとう』の中でこう述べている。

童謡集「きりんさん」は、今、現在の佐々木寿信童謡集として、これ以上のものはないと自負しています。

「きりんさん」は、障害を持つ彼の人生を賭けた魂の一冊です。故里への愛、母への愛、その不滅の記念碑です。

(武鹿 2008, p. 102)

『きりんさん 佐々木寿信童謡集』の発行に当たり、武鹿は、送られてきた佐々木の1000編を越す詩に何度も目を通し、150編を選び出し、自分の原稿用紙に書き移して心に入れ、その中からさらに50編を選んだという。地方の一詩人が、武鹿の心をここまで突き動かしたのである。

また、同書に収められている50編の詩のうち16編が作曲され、17曲の童謡が誕生している。湯山昭をはじめとする9名の作曲家が佐々木の詩に曲を付けている。佐々木は、2008年の『きりんさん 佐々木寿信童謡集』発行後の5年間に、次々に詩集・短歌集・随筆集・小説・童謡集を発表している。

佐々木の詩に曲が付けられ、童謡が次々に誕生したのも、4期に入った頃からである。佐々木の詩に魅了された、全国の作曲家や音楽関係者が、次々に作曲するようになった。そして、ある程度の曲数が蓄積されると、勤めていた社会福祉法人「亀の子」や地元の印刷会社で曲集を制作し配ってきた。そして、「三木露風賞 新しい童謡コンクール」の最優秀賞受賞も契機になり、著名な作曲家が曲を付けるようにもなった。2012年には佐々木の詩による童謡の代表作ともいえる『童謡曲集 僕がうたう秋のうた』が発行されている。

2013年2月から3月にかけて「NHKみんなのうた」で全国放送された《泣き虫ピエロ》は次のよう

な経緯で生まれた童謡である。

『きりんさん』の表紙絵・挿絵を担当した葛西薫は、1997年の「NHKハート展」で佐々木の詩に絵を添えたことで交流が始まった。葛西は佐々木の詩にいつしか魅了されるようになり、「佐々木さんの詩を中川俊郎さんが作曲したらどんなにかいいだろう」（葛西、2013、p. 4）と思うようになった。そして、葛西が中川に作曲を依頼するかたちで《泣き虫ピエロ》が誕生したのである。「NHKみんなのうた」を通して、全国の子どもたちに発信された。詩や音楽の関係者ではなく、美術の関係者がかけ橋となり曲が生まれたのである。このことから、佐々木の詩がいかに読む人の心をとらえ魅力的であるかがわかる。

このように佐々木は、自分の書く詩に曲が付けられ、童謡として広く歌われることを願い、40年間詩を書き続けてきた。そして、長い年月の努力が報われ、夢が徐々に実現し、かたちとなって表れてきたのが4期といえる。

2013年3月、佐々木は社会福祉法人「亀の子」での仕事を辞職した。自宅で姉と暮らしながら、またこれまでとは違った心境で詩の創作を続けている。5期に入ったばかりであるといっただけであろう。2013年12月には詩集『おげんきですか』を発行するなど、精力的に創作活動に取り組んでいる。

Ⅲ 童謡詩人・佐々木寿信の人物像と童謡の世界

1 童謡詩人としての出発

2013年11月21日、大田市の佐々木の自宅を訪ね、佐々木本人にインタビューをした。佐々木からは、たくさんの著名な詩人や作曲家の名前が次々とあがり、大変驚いた。これまで知られていなかった童謡の世界での佐々木の交友関係が徐々に浮かび上がってきた。その交友関係は予想以上に広く、つながりも深いことがわかった。

18歳で発症した佐々木は、詩を書くことが心の支えとなっていった。そして、佐々木は、受ける印象からは想像できないような、思い切った行動に出る。佐々木は有名詩人である、まど・みちお（1909～）に直接手紙を送ったのである。佐々木が20代後半の頃のこと、39歳年上のまどは60代後半であった。1959年に出版社を退社したまどは、当時精力的に詩を創作し発表していた。童謡も数多く発表され、1963年にはそれまでに創作した童謡を『ぞうさん まど・みちお子供の歌一〇〇曲集』としてまとめている。1968年には初めての詩集『てんぷらびりびり』

を出版し、第6回野間児童文芸賞を受賞している。佐々木にとって、まどの存在は大きく、目標とする詩人であっただろう。佐々木は、まどの紹介で日本童謡会に入会し、雑誌『童話』に投稿するようになった。

まど先生は、自分はどこにも所属してないけれども、……『童話』という雑誌に毎月出しとる、ということが書いてあったから、先生の住所も『童話』の求め先も書いてあったし、……後藤檜根先生が主催しとって、『童話』という雑誌を出しとるんです。そこへ入会したのが、まど・みちお先生の紹介です。そこからが出発点です。

（佐々木 2013. 11. 21, 大田市自宅）

戦後の混乱の中で創刊され、継続して発行された『童話』は、多くの児童文学に関わる作家や詩人に注目されてきた。まどが、佐々木にこの『童話』を紹介したことは、佐々木の「童謡詩を書いていきたい」という強い願いを叶えていく出発点となった。

また、まどに手紙を出したのと同時期に、佐々木は作曲家の大中恩（1924～）に直接電話をした。上京した姉に電話番号を調べてもらい、紹介なしで自宅に電話をかけたという。

大中は、1955年3月に中田喜直、磯部俣、宇賀神光利、中田一次らと「ろばの会」を結成した。この会は、特に子どものための音楽、子どもに媚びない新しい芸術的な「こどものうた」を作っていこうというものであった。1960年前後からは大中の作曲した《サっちゃん》《おなかのへるうた》《いぬのおまわりさん》《ドロップスのうた》などの童謡が徐々に全国的に流行した。

佐々木が20代後半の頃、大中は50代前半であった。大中は時の作曲家として、既に名が広く知られていた。また、この時期はカラーテレビの普及とともにNHKの幼児向け番組「おかあさんといっしょ」、「うたのえほん」、「みんなのうた」などがテレビやラジオで放送され、大中が作曲した童謡の数々は日本中で歌われていた。

佐々木は、NHKのテレビ番組「昼のプレゼント」で、偶然、大中が出演している場面を観たのである。そして、大中本人が語る、ある言葉がきっかけとなり、電話をしようと考えた。

……たまたまその週は童謡の作曲家が出ていて、

大中先生は、自分は元気な男の子の歌が書きたいって言われた。

(佐々木 2013. 11. 21, 大田市自宅)

こうして、佐々木は夜遅くにならないと帰宅しない大中を待って、夜の11時ごろに電話をかけたという。何が何でも、という決意の大きさが表れた行動である。佐々木はこの時のことを次のように振り返っている。

……大中恩先生に作曲していただくために詩を送りだして、詩を見て先生は何も言わずに対応してくれて、そこで「あなたの詩はダメだから作曲できん」と言われていたら、ぼくの道は閉ざされていたと思います。作曲はしてくれなかったけれど、「ダメ」と言われなかったからやってこられたと思います。

(佐々木 2013. 11. 21, 大田市自宅)

世に認められている大作曲家に、紹介もなく夜遅く電話した佐々木は、おそらく、藁をもすがる思いであったであろう。どんなにか勇気を振り絞ってダイヤルを回したことだろうか。

こうして、佐々木は本格的に童謡詩を創作するようになり、『童話』にも投稿するようになった。そして、1983年2月15日、とうとう初めての童謡《雪の日》が誕生し、翌月の『童話』3月号に掲載されたのである。

25歳の時、童謡詩を書いていこうとした決心した佐々木は、20代後半になって、童謡界の第一人者である詩人・まど・みちおへ手紙を出し、作曲家・大中恩へ電話をかけ、指導を仰ぐことで童謡詩人としての第一歩を踏み出したのである。これはかなり思い詰めた行動だったと思われるが、まども大中も、佐々木の一途な願いや思いを摘み取るようなことはしなかった。むしろ、佐々木の存在を認め、厳しくもあたたかい目で見守っていこうと考えたのではないかと想像する。佐々木はこの第一歩によって、童謡詩の創作に徐々に明るい気持ちで打ち込めるようになっていったのである。

2 「三木露風賞新しい童謡コンクール」を通して

佐々木の存在が徐々に知られるきっかけとなったのが、「三木露風賞新しい童謡コンクール」における三度の入選、二度の最優秀賞受賞である。この「三木露風賞新しい童謡コンクール」は、童謡《赤と

んぼ》の作詞者・三木露風の生誕地、兵庫県たつの市が主催するコンクールである。2013年で第29回を迎え、現在では5,000編を越える応募のある、日本最大の童謡詩のコンクールといつてよいだろう。

初期の頃の応募方法は、詩と曲がペアになった「童謡」としての応募だった。佐々木は1989年の第5回から応募し始めた。そして、初の応募作《びわ》が佳作に入選したのである。佐々木が41歳の時である。

20歳代後半で童謡界にデビューし、コツコツと創作活動に打ち込んできた佐々木は30歳代になり、詩人のまど・みちお、作曲家の大中恩に加え、多くの詩人や作曲家と交流をもつようになっていった。特に「三木露風賞新しい童謡コンクール」の入賞詩発表会などの直接出会えるチャンスでは、自分から積極的に声をかけ、交流の輪を広げていった。そして、1985年、37歳の時には詩人・武鹿悦子との交流ももつようになり、佐々木はさらに高い目標を持ち、意欲的に童謡詩を創作していった。10年来の努力が実を結んだといっても過言ではないだろう。佐々木は1989年から2004年の15年間、同コンクールに応募し続けた。次の表は受賞作品の一覧である。

表1 「三木露風賞新しい童謡コンクール」受賞歴

西暦	年齢	受賞歴	作品名・作曲者	備考
1989年	41歳	第5回 佳作入選	《びわ》 矢田部 宏 作曲	・矢田部とは童謡協会の季刊誌『こどものうた』で出会う。 ・詩と曲ペアでの応募。
1992年	44歳	第8回 最優秀賞受賞	《なつのはり》 杉田志保子 作曲 伊藤幹翁 編曲	・杉田は日本童謡協会会員。 ・杉田とは「同コンクール入賞詩発表会」の会場で出会う。 ・詩と曲ペアでの応募。
1993年	45歳	第9回 佳作入選	《猫柳》 高月啓充 作曲	・高月は日本童謡協会会員。 ・高月とは「同コンクール入賞詩発表会」の会場で出会う。 ・詩と曲ペアでの応募。
1996年	48歳	第12回 佳作入賞	《掃り道》 高月啓充 作曲 《雨上がり》 高橋知子 作曲	・高橋は日本童謡協会会員。 ・高橋とは『季刊どうよう』への投稿が縁で出会う。 ・詩と曲ペアでの応募。
2004年	56歳	第20回 最優秀賞受賞	《きりんさん》 湯山 昭 作曲	・湯山は日本童謡協会の会長。 同コンクールより委嘱されて作曲。 ・詩のみの応募

佐々木の全作品からみれば一部ではあるが、これらの受賞曲は佐々木の代表作といつてもよいだろう。佐々木の方から積極的に詩人や作曲家に接触し、つながりができ、そのつながりがさらに広がり、童謡が次々に生まれていったのである。

IV 佐々木寿信作詩の童謡の教材化と授業実践

1 小学校音楽科学習指導要領に基づいた童謡の位置付けとねらい

2008年の中央教育審議会答申では、知識基盤化社会やグローバル化という、今後の社会の変化に対応し、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことがますます重要になっていると改訂の経緯の中で述べられている。この豊かな心をはぐくむために、音楽科教育が担う役割は大きく、今後ますます音楽科学習の充実は求められていくと思われる。

佐々木による童謡を中央教育審議会答申における音楽科の改善の基本方針と照らし合わせてみる。

① 音楽のよさや楽しさを感じることにについて

佐々木による童謡はやさしい言葉で表現されており大変親しみやすい。言葉の抑揚や言葉の持つリズムから旋律が作られているため、旋律が自然で美しく、演奏者の心をとらえるのである。また、比較的演奏時間が短い曲が多く、授業で扱うときに何回も繰り返して演奏することができるため、できる楽しさも早く味わうことができる。そして、友だちとかかわり合いながら学級全体で演奏することによって一体感を味わうことができる。

② 思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成することにについて

佐々木による童謡を教材としてみたとき、その教育効果の一つに、曲の作り手の立場に立つことができるということがあげられる。詩人である佐々木や佐々木の詩に魅力を感じている作曲家が、どのような思いや意図をもって童謡を創作したのか想像しやすい。詩や楽譜から佐々木や作曲者の思いや意図を読み取り、なぜそう表現したのか考える学習は、童謡のよさをより深く味わうために効果的であり、学習したことを自分の表現活動や鑑賞活動に生かしていくこともできる。

③ 音楽と生活とのかかわりに関心を持つことにについて

佐々木による童謡は、島根の美しい風土や温かい人間関係、日々の暮らしから生まれており、大変身近に感じることができる音楽である。表している内容が児童にとってもわかりやすく、共感することができるのである。身近な生活を題材に音楽が生まれていることを知り、生活することと詩や音楽で表現することが、実は関係性があることを、児童は気付いていくことができる。

④ 歌唱、器楽、創作、鑑賞ごとに指導内容を示すことについて

佐々木による童謡は、児童の実態や単元授業時数によって、一つのねらいに絞った学習指導案を立てたり、ねらいを組み合わせた学習指導案を立てたりと、バリエーション豊富な指導をすることができる。各学校の実態や学習内容の連続性に配慮した、歌唱、器楽、創作、鑑賞ごとに指導内容を示すことに適した教材であるといえる。

⑤ 音楽に関する用語や記号を音楽活動と関連付けながら理解することについて

佐々木による童謡の表現方法は、楽譜上からだけでなく、詩と関連付けて考えることができる。作曲者は佐々木の詩からイメージを膨らませ、さらに佐々木の思いや意図を音におきかえて楽譜に記し、よりふさわしい表現を楽譜上に用語や記号を用いて表している。児童が表現の工夫をしようとするとき、なぜそう表現するのか、なぜそう表現した方がよいのか理由を考え、表現の工夫を試行錯誤していくことができる。楽譜から読み取った音楽に関する用語や記号を、詩から受けるイメージや作曲者の思いや意図と結びつけることによって、音に変えて実感していくことができるのである。

⑥ 我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつことにについて

佐々木は全国に知られる童謡詩人である。曲も大変情感的で美しいものが多い。島根県におけるわらべうた・民謡といった各地域に古くから伝わる音楽や芸能《安来節》《キンニャモニャ》《石見神楽》《鷺舞》の学習の基盤として、佐々木の存在と佐々木の詩による童謡を、現代に生まれる「地域の音楽」ととらえることで、筆者は佐々木による童謡に着目することが、我が国の音楽文化に愛着をもつことの窓口になるのではないかと考えている。現代に生まれている「地域の音楽」を学習することは、更には、明治以降に日本人によって作詩・作曲された「日本の歌」を学ぶかけ橋にもなると考えている。

2 第5学年及び第6学年における授業実践

授業実践は、1単元1時間の計画で、益田市の小学校、第5学年・第6学年4クラス(合計児童数100名)に対し行った。

○題材

石見の童謡詩人・佐々木寿信の童謡に親しもう

○題材の目標

・童謡詩人・佐々木寿信に関心を持ち、佐々木の
 思いを想像しながら、積極的に童謡に親しもうと
 する。(音楽への関心・意欲・態度)

・詩の内容からイメージを膨らませ、楽譜からふ
 さわしい表現を読み取り、歌い方を工夫しようと
 する。(音楽表現の創意工夫)

○教材曲 《なつの終わり》

佐々木寿信 作詩 / 杉田志保子 作曲
 伊藤幹翁 編曲

《泣き虫ピエロ》

佐々木寿信 作詩 / 中川俊郎 作曲
 中川俊郎・佐藤彰信 編曲

久 隆信 ピアノ編曲

○評価規準

(1) 領域・分野と評価の観点との関連

評価の観点 領域・分野	ア) 音楽への関心・ 意欲・態度	イ) 音楽表現の 創意工夫	ウ) 音楽表現の 技能	エ) 鑑賞の能力
A・歌唱	○	○		
A・器楽				
A・音楽づくり				
B・鑑賞	○			○

(2) 題材の評価規準

	ア) 音楽への関心・意欲・態度	イ) 音楽表現の創意工夫
題材の 評価規準	童謡詩人佐々木寿信に関心を持ち、佐々木の思いを想像しながら、積極的に童謡に親しみ、思いや意図をもって学習に取り組もうとしている。	詩の内容からイメージを膨らませ、楽譜からふさわしい表現を読み取り、自分の考えや願い、意図をもって歌おうとしている。

○主な学習活動と発問

- ① 童謡詩人・佐々木寿信について知る。
- ② 目標を確認する。
- ③ 《なつの終わり》の詩を音読する。(2～3回)
- ④ わらべうた「ゆびきり……」を歌いながら、近くの友達と楽しく遊ぶ。
- ⑤ 自然に発音したとき、「ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのまそ」の言葉のまとまりとイントネーションについて考える。

宇宙人のように一定のリズム、調子でしゃべってみよう。

なるべく自然に発音し、ことばのまとまりを考えて、区切ってみよう。

- ⑥ 指導者の範唱を聴く。

「ゆびきり……」の部分がどのような拍子やリズムになっているか、楽譜を見ながら聴いてみよう。

- ⑦ 斉唱する。
- ⑧ 楽譜からふさわしい表現を読み取り、歌い方の工夫をする。

楽譜には歌い方のヒントになるもの(音符・休符・記号・用語など)が隠れています。見つけてみましょう。また、なぜそう表現するとよいのか考えてみましょう。

- ⑨ 最後にスクリーン(大田市五十猛町の写真)を見ながら《なつの終わり》を歌う。

3 アンケート結果と授業の考察

アンケートは、音楽への関心・意欲・態度についての項目、音楽表現の創意工夫についての項目、授業者への評価項目、計10項目で実施した。以下が結果である。

表2 音楽授業振り返りシート(アンケート集計結果)

♪ 音楽科授業振り返りシート 結果 ♪ 2013.12.2(月) 小学校5年生・6年生対象 (授業後教室において担任が実施)		よくあてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	全然あてはまらない	4件法平均値
母体数 5年生…45人・6年生…54人 合計…99人 (欠席者は除く) 4件法平均値は、a:4 b:3 c:2 d:1に換算して計算		a	b	c	d	
振り返り項目		%	%	%	%	4～1
①	楽しく授業に取り組むことができた。	87.9	12.1	0.0	0.0	3.9
②	スクリーンや黒板・ホワイトボードなどは見やすかった。	76.8	23.2	0.0	0.0	3.8
③	先生の説明・指示はわかりやすかった。	81.8	18.2	0.0	0.0	3.8
④	友だちと仲よく活動することができた。	73.7	25.3	1.0	0.0	3.7
⑤	童謡詩人の佐々木寿信さんに興味をもつことができた。	47.5	47.5	4.0	1.0	3.4
⑥	佐々木さんの童謡《なつの終わり》はいい曲だと思った。	72.7	25.3	2.0	0.0	3.7
⑦	童謡《なつの終わり》の詩や曲から、イメージをもつことができた。	54.5	43.4	2.0	0.0	3.5
⑧	楽譜にある記号や用語の意味がわかった。	64.6	33.3	2.0	0.0	3.6
⑨	楽譜にある記号や用語から、歌い方を工夫することができた。	54.5	43.4	2.0	0.0	3.5
⑩	もっと佐々木さんの童謡を歌ったり聴いたりしたい。	52.5	39.4	7.1	1.0	3.4
(平均)						3.6

アンケートは4件法で行い、a:4,b:3,c:2,d:1に換算して数値化した。全体的に予想以上のよい結果であったことが明らかになった。全項目平均値が3.6と高数値だったため、授業のねらいはほぼ達成できたと感じている。

i) 授業における「わかりやすさ」のための工夫

アンケート結果(4件法平均値)の高い順に3項目をあげてみると、項目①の楽しく授業に取り組むことができた、は3.9、項目③の先生の説明・指示はわかりやすかったは3.8、項目②のスクリーンや

黒板・ホワイトボードなどは見やすかったは3.8であった。授業における「わかりやすさ」のための工夫は、授業づくりの基盤となることがわかった。楽しい授業にするためには、見えやすさ、説明・指示のわかりやすさは必要不可欠な条件であることが明らかになった。以下の㉗～㉙はその工夫である。

㉗ 佐々木寿信に興味・関心をもち、より身近に感じたり理解したりするために、パワーポイント（写真や音楽）を使って説明し、導入を5分間にまとめた。

㉘ 視線を集めるために、詩の音読や楽譜を見て歌う活動では、スクリーンに集中させるようにした。また、視力の悪い児童にも配慮し、楽譜は印刷したものを全員に配った。

なつの終わり

佐々木寿信

夏になったら また会える さよなら橋を わたる時 指切りげんまんうそついたら針千本のまそ なつの終りの 夕ぐれの 赤い夕日が沈みます	夏になったら また来よう 思い出橋を とおる時 指切りげんまんうそついたら針千本のまそ なつの終りの 夕ぐれの 沈む夕日にちかいます
--	--

図1 パワーポイントによる詩の提示

㉙ 楽譜上の強弱を示す記号、速度を示す記号、演奏の仕方を示す記号、曲想を示す用語については、児童から気付きのあったものをその都度カードで見せ、全員で確認するようにした。

㉚ 学習活動の指示は説明と共にスケッチブックを使用して提示した。

♪学習活動2
「ゆびきりげんまん…」
自然に発音し、ことばのまとまりを考えて区切ってみよう
ペアで！必ず相談！2～3分

♪学習活動5
《なつの終わり》
楽譜から歌い方のヒントを見つけよう（記号や用語）
→歌い方の工夫をしよう
→理由を考えよう

図2 スケッチブックを使用した指示の工夫

ii) 授業形態の工夫より

本授業では友だちと関わりながら活動する場面を4場面設けた。「ゆびきり……」を実際に友だちと歌いながらやってみる活動（4人グループ）、「ゆびきり……」を宇宙人ようにしゃべってみる活動（ペア）、「ゆびきり……」を言葉のまとまりを考えて区切る

活動（ペア）、楽譜からふさわしい表現方法を読み取る活動（ペア）の4場面である。

仲良く関わることのできる活動は、一人ひとりの楽しさや意欲へとつながっていることが感想からも読み取れた。学習形態の工夫によって、児童のモチベーションを高め主体的に取り組むことができるようになることがわかった。

授業の感想を書いて下さい

ほくはなつの終りの曲だと思いましたが、曲の一番ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのまを部分を分けるのがとても楽しかったです。


授業の感想を書いて下さい

今日、授業をして私が思ったことは、とても楽しかったことです。理由は、友達と仲よく活動できたし、歌も、すぐ（ええ）よくなって、みんなで工夫をして、とてもきれいにうたえたからです。今日の授業は、とても楽しかったです。

図3 児童のアンケート

iii) 音楽への関心・意欲・態度より

導入において佐々木の紹介・説明を工夫し、教材《なつの終わり》の学習を魅力的に構成していけば、作詩者や作曲者の思いを想像しながら、見る・聴く・考える・表現する学習活動に、友だちと積極的に関わりながら取り組んでいけることがわかった。また、アンケートの自由記述からも、《なつの終わり》は教材として大変適していることがわかった。



♪音楽ワークシート

♪《なつの終りの》の次の持ちこたへく自然に発音し、ことばのまとまりを考えて、丸で囲んだり線で区切ったりしてみましょう。（セント4つ5つ）

ゆびきりげんまんうそついたらはりせんぼんのま

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

図4 活動⑤の説明

図5 ワークシートより

iv) 音楽表現の創意工夫より

楽譜からふさわしい表現を読み取るための工夫は、一人ずつ歌唱パートのみの楽譜を配り、音楽に関する記号や用語を楽譜に見つけ印をつける活動を入れたことである。個人の活動からペアへ、そして全体へとつなげ、スクリーンに映した楽譜を見ながら音楽に関する記号や用語を一つずつ確認した。そして、童謡詩人・佐々木の思いを作曲家が音楽で表現するために、強弱を示す記号、速度・演奏の仕方を示す記号、曲想を示す用語が楽譜に記され、詩の世界によりふさわしい表現にしようとしていることに気付くようにした。



図6 授業の様子

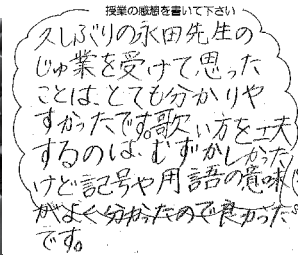


図7 児童のアンケート

v) 授業の考察

課題と感じたのは、佐々木の詩や童謡をもう少し深めることができたのではないかと、ということである。自分のペースでゆっくり味わい、感じ、自分自身に問いかけ、表現を工夫していく時間がもう少しとりたかったと感じた。可能であれば2時間で授業を計画し、自分が感じ取ったことを自分の言葉で表す活動などを入れたり、表現の工夫を試す機会を多く設けたりして、さらに佐々木の童謡のよさをゆっくり味わい深めていくことのできる授業に改善していきたいと考えている。

V おわりに

本研究では、童謡詩人・佐々木寿信の人物像と創作活動の全体像を明らかにするとともに、佐々木の詩による童謡を「地域の音楽」としてとらえ、音楽科における地域独自の歌唱教材の開発を試みた。

佐々木の詩による童謡は、2013年12月の段階で349曲存在し、作曲者は大中恩をはじめ、プロの作曲家から愛好家まで42名存在していることがわかった。そして、40年間に及ぶ創作活動を大きく4期に分け、童謡詩の創作活動の全体像を明らかにした。20代後半になって、童謡詩を書いていこうと決心した佐々木は、童謡界の第一人者である詩人・まど・みちおと、作曲家・大中恩に直接連絡を取り、指導を仰ぐことで童謡詩人としての第一歩を踏み出したのである。佐々木はこの第一歩によって、童謡の世界で多くの詩人や作曲家とつながっていくきっかけを得ることができ、その後、積極的に童謡詩を創作するようになり、童謡が生まれていったことがわかった。

また、「三木露風賞新しい童謡コンクール」の入選作品に焦点を当て、佐々木がどのようにコンクールに応募し最優秀賞を受賞するに至ったか、どのような過程で曲がつけられ発表・演奏されてきたのか、その作品の魅力とともに明らかにした。佐々木は自分から積極的に詩人や作曲家にアポイントメントをとってつながりを得て、さらにそのつながりが広がり、童謡が

次々に生まれていったことがわかった。

第5学年及び第6学年における授業実践では、誰でも授業がしやすく、また広く実践できるように、佐々木の童謡を教材開発し、授業のモデルプランを提示した。このモデルプランは、授業の考察や授業協力者・参観者からの感想からも、詩と音楽が一体となって生みだされる美しさを味わうことができ、歌詞や曲想を生かした表現の工夫をすることができるものであると、手応えを感じる事ができた。そして、佐々木の童謡がもつ音楽的な美しさや芸術性の高さも実感した。佐々木と佐々木の童謡に親しむことによって、子どもたちが自分たちの住む美しい地域に愛着をもち、ふるさとのよさを再認識する機会にもなった。佐々木の童謡は子どもたちの心に響き、共感し、感動できるものであることが確認できた。

本研究のきっかけとなった、「佐々木の詩による童謡の素晴らしさを、もっとたくさん子どもたちに知ってもらいたい、歌ってもらいたい」という願いからスタートした研究を、前進させることができたと感じている。特に授業実践では手応えを感じる事ができた。今後はさらに佐々木の童謡の教材化を図り、実践に取り組んでいきたい。

【謝辞】

本論文をご指導いただいた藤井浩基先生、島根大学の関係者の皆様、また、授業協力校の皆様に、心より厚く感謝いたします。ありがとうございました。

〈参考・引用文献〉

- 伊野義博(2003)『『郷土の音楽』教材化試論(1 諸民族の音楽・郷土の音楽・ポップスを教材とした学習, II 新しい教材の導入)』『日本学校音楽教育研究会紀要』7号, p. 76.
- 葛西薫(2013)「夢のあした」『NHKみんなのうた2・3月号』日本放送協会・NHK出版, p. 4.
- 小島律子(2008)「音楽授業の中で郷土の音楽をどう扱うか」『日本学校音楽教育研究会紀要』第12号, p. 216.
- 佐々木寿信(2012)『随筆集 日時計』島根日日新聞社
- 武鹿悦子(2008)『『きりんさん』おめでとう』『きりんさん 佐々木寿信童謡集』てらいんく, p. 99, p. 102.
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 音楽編』